No.82

＼明日の授業に１ページのエッセンスを／

らいぶ LIVE創 CREATOR つくりえいた～

２０２０年6月

CONTENTS

●学校長，研究企画長ご挨拶
●家庭学習の充実　～臨時休業中の学習サポート～
●実践紹介
- 音　楽　科　「リコーダー授業の再考」
- 生　活　科　「元気な野菜を育てよう」
- 体　育　科　「力の限り　スロー×スロー」
- 算　数　科　「おおいほう　すくないほう」
- プログラミング　「低学年のプログラミング教育」
- 国　語　科　「観点を明確にした評価シート」
- 道　徳　科　「命について考えよう」
- 図画工作科　「生活の中の形や色とかかわる」

●教育研究発表会，ＩＣＴ活用授業研究会のご案内





校　長
北垣　有信

学校長ご挨拶

今年の教育実践は，学級開きもままならない異例ずくめの中で始まりました。

しかし，ピンチの時こそチャンス。次代を見据えＩＣＴを駆使した試みが全国諸処から報告されています。もちろん本校も然り，こんな時だからこそ子どもに真に寄り添った実践を模索しているところです。

地域とともに在る附属学校として，実践研究をできるだけ多くのみなさまにお届けしたく思っています。忌憚のないご意見をいただくことができれば幸いです。

研究企画長ご挨拶



研究企画長
中山　和幸

これまで，研究主題を「未来に生きて働く資質・能力の育成」と掲げ，知識の活用を視点とし，探究のプロセスを充実させることで探究力を育むことができるようなカリキュラム・デザインの方法を明らかにすることができたことは大きな成果でした。

さて，本年度は３年次として「探究の質を高める授業づくりの『しかけ』と評価の在り方」を研究副題に掲げました。どの教科等の授業づくりにおいても「探究」をキーワードとし，子どもが自ら探究し，その質を高めていくことができるよう，授業づくりの「しかけ」に研究のスポットを当てます。また，子どもたちの「探究」を支援していくための適切な評価の在り方についても考えていきます。

和歌山大学教育学部附属小学校

新型コロナウイルス感染症対策

臨時休業中の学習サポート

家庭学習の充実



目的

○臨時休業中の学習を補充し，学力をつける。
○規則正しい生活習慣，学習習慣を維持，確立する。

学習プランと家庭学習ワークシートの充実

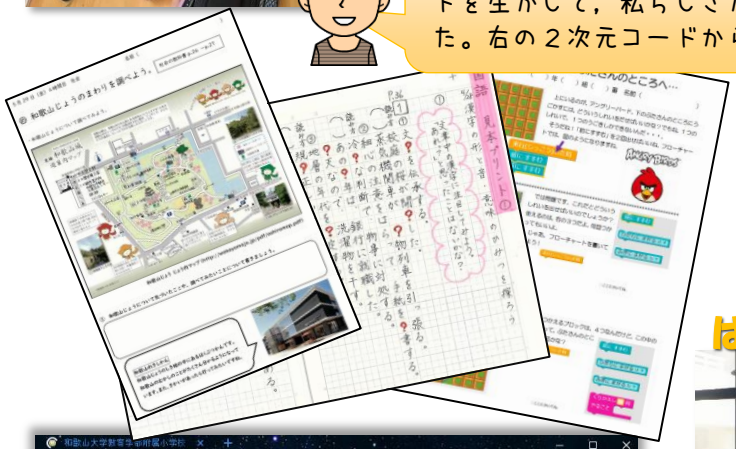


本校では，各学級で学習プランを作成・配布・運用し，学習を進めています。そこで，その学習プランを臨時休業中も活用し，家庭にいながら，見通しをもって学習を進められるようにしました。また，規則正しい生活習慣・学習習慣の確立を図れるようにしました。





子どもが，自分で選べる課題を作りました。また，得意なイラストを生かして，私らしさが感じられるプリント作りを意識しました。右の２次元コードから，プランのサンプルをご覧ください。



定期的な励ましメール，励まし電話等により，担任と児童・保護者が常につながることを重視し，取り組みを進めてきました。

はげまし電話・はげましMail





学習方法や内容の問い合わせは，専用メールアドレスで受け付け，その後，メールや電話等により解説・指導等を行いました。



週２回，担任からの励ましメールを送信しました。ＷＥＢにアップした動画メッセージは，日常の出来事を紹介するなど，ほっこりと楽しめる内容にしました。

本校児童・保護者専用の学習サポートＷＥＢページを開設し，学習プランや自作のプリント，学習動画，学習内容解説，解答例などを掲載しました。また，文科省「子供の学び応援サイト」やNHK for School 等の外部リンクに加え，教職員からの動画メッセージや体操，チョウの成長の様子，理科の実験等も掲載しました。

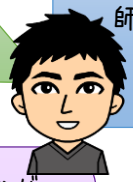
学習サポート用WEBページの充実



指導・解説用の動画だけでなく，子どもたちをほっこり励ますメッセージ動画に，先生方の愛情を感じます。
私もチョウの産卵シーンを配信し，虫ぎらいの子どもたちにも，生き物はみんな必死で命をつないでいる感動を伝えたいなと思いました。



クイズを出すと，メールで答えを送ってくれました。日常の出来事を伝えると，家庭での活動の様子を動画や写真で知らせてくれました。双方向性の確保や，子どもの顔が見える＆教師の顔が見えることの重要性を改めて感じました。



「おもしろい」「わかる」「できる」「力がつく」が実感できる課題を心がけました。例えば，プリントのイラストや問題文に教師が登場・テレビ番組のような題名・一言アドバイス・立ち止まって考えるしかけ・振り返りなどです。





家庭での学習を継続させて生かしながら実施できるよう，学習を生活（家の中のひと・もの・こと）とつなぎました。キッチンのテーブルの長さを測ったり，家族にインタビューしたりする活動を取り入れるなどの工夫をしました。

動画とプリントと連動させて学習の幅を広げました。一番伝えたいところを数分だけ撮影することで作業効率を上げました。子どもの目線に立ち，どんな思いで取り組むかなども予想しながらプリント課題を作成しました。

メディアのメリットとデメリット

メリットを十分に生かし，デメリットを他のメディアで補完するなど，相互作用を意識して活用しました。

	学習プリント	動画配信	会議アプリ
メリット	・読み，書き，計算等により基本的な習熟が期待できる。 ・記録が残るため，評価に役立てやすい。 ・計画的に課題を出しやすい。 ・準備にかかる時間が比較的短い。	・実技系の手順や動き，音声が伝えられる。 ・自分の（子どもに合った）言葉で伝えられる。 ・画像により興味を湧かせることができる。 ・要点の部分にフォーカスすることができる。	・実際の授業に近い形で子どもの顔を見ながら行うことができる。 ・その場でリアルタイムに質問を受けることができる。 ・フォーカスしたい要点を示すことができる。 ・参加者同士で交流（話し合い）ができる。
デメリット	・受け身になりやすく，主体的になりにくい。 ・手順や動きが伝えにくく，音声も伝えられない。 ・一方的で限定的な説明になりがち。 ・興味が持続しにくい。	・その場で質問を受けられず，一方的になる。 ・子どもの顔が見えない。 ・長時間になると，集中しにくい。 ・準備にかかる時間が比較的長い。	・時刻が限定されるため，参加できない場合がある。 ・大人数で行うと，教師との双方向になりにくい。



Wi-Fi 環境のない家庭には，タブレットＰＣに動画を保存して貸し出しました。

学習サポートページは，「今日も見てみよう」と思ってもらえるよう，デザインや配色等を何度か変更して新鮮味を出しました。
動画撮影時には，子どもたちにあたたかく語りかけるように心がけました。また，ネット配信された動画閲覧時に，広告や関連動画の表示によって集中力が途切れないよう，クラウドの動画データに直接アクセスする方法を選びました。







学習サポート用動画の作成

らいぶすくえあ#1

音楽科

音楽専科

北川 真里菜

リコーダー授業の再考
～自ら習得しようとする子どもをめざして～

全国でほぼすべての小学校の子どもたちが所有しているといわれる楽器，リコーダー。昭和 34 年から学校の音楽教材として使われてきたそうです。

しかし，「リコーダーが苦手」という子どもは思いの外多いものです。

学習指導要領において，音楽科における技能は，表したい音楽表現に必要となるものとして位置付けられ，思考力・判断力・表現力等の育成と関わらせて習得できるようにすべき内容であることが明確となりました。

本稿では，リコーダー指導において「教師が教える」授業から「子どもが自ら獲得する」授業への転換を図った第５学年の実践を紹介します。

●題材の流れ

楽器編成を工夫して合奏しよう！『威風堂々』

題材のねらい…楽器の音色や重ね方による曲想の変化に気付く。

時	学習活動
1	様々な楽器編成の『威風堂々』イを聴き比べる。
2～3	音楽室にある様々な楽器で『威風堂々』イの主旋律を演奏する。
4～6	小グループに分かれ，演奏したいイメージの『威風堂々』イに合う楽器編成を考えて合奏する。
7	オーケストラ編成の『威風堂々』を全曲通して聴く。

本題材を進める中で，弦楽器，管楽器，ピアノソロなど様々な楽器編成の『威風堂々』を聴きました。楽器によって音楽の感じが変わることに気付いた子どもたちは，自然と「じゃあ木琴だけで弾いたらどんな感じになる？」「リコーダーは？」と，自分に身近な楽器で演奏してみたいという気持ちを表し始めました。

そこで第３時に，リコーダーで演奏する活動に取り組みました。

●活動の様子

子どもに演奏を指導する際，「指使いはこうですよ」「もっとこんなふうに吹きましょう」など，教師の指示が多くなりがちです。

本楽曲では，子どもたちがこれまでに吹いたことのない「ファ♯」の音やサミングの音など，指使いや息使いを教えたい項目がありますが，あえて楽譜を提示するだけでそこには教師から触れず，「教科書の最後のページに運指表があるね」と言って活動をスタートさせました。



図１：指使いを教え合う子どもたち

子どもたちは，わからない指使いがあれば，自主的に運指表を見て調べたり，周りの友達に質問したりしながらなんとか解決しようとしていました（図１）。

教師は，子どもたちの様子を見回り，低い「レ」の音がうまく出せない子，サミングがうまくできない子など，困っている子どもを把握しておきます。

●できている子の演奏を取り上げる

教　師：こうたさんのレの音がすごくきれいなんだけど…。
　　みんなの前で吹いてもらってもいいかな？
こうた：〈演奏する〉
ま　り：すごい！もう１回！
り　な：どんなふうにしたの？
こうた：息を弱く，なんていうか下向きに吹いたら，うまく鳴るようになった。
たけし：試してみよう！

●困っていることをみんなで考える

子どもたちが迷ったり，困ったりしていると，活動を止めて「どうすれば高いファがうまく出るのかな」と，学級全体で考えたり，試したりしながら進めていきました。

子どもたちが活動を主体的に楽しそうに進めている様子を見て，教師が最初から知識・技能を与えるよりも，子どもの困り感が表れたり，問題意識が生まれたりしたときに解決方法を共に考えていくことの重要性を改めて感じました。

また，教師からの一方的な指導を抑えることで，子どもたちは自然と周囲の友達と関わる必要性を感じ，協働的な学習が促されたのです。

このような主体的で協働的なリコーダー技能の習得授業には，リコーダーの導入期に行われる基本的な奏法（操作や息使い・姿勢など）についての丁寧な指導やリコーダーという楽器自体の魅力についての理解が必要となります。また本題材においては，リコーダーで演奏することをとおし，音色によって音楽の感じがどのように変わるのかを調べたいという思いや願いを，子どもたちがしっかりともっていたことも大きく作用したように思います。

何のために吹くのか，技能を思考・判断とどう関わらせるのか，教師がしっかりと意図をもって授業を組み立てることの重要性にも気付くことができた実践となりました。

附属人

＃音楽づくり　＃楽曲分析

子どもが仲間と協働して自ら学ぶ姿をめざし，楽曲分析を核とした学びの実感を得られる授業研究に取り組んでいます。



marinak@wakayama-u.ac.jp

らいぶすくえあ#2

生活科
1年A組担任
田中　伸一

元気な野菜を育てよう
～繰り返しかかわり続ける体験～

子どもたちは，野菜や土と繰り返しかかわり続けていく中で，一人一人が新たな課題をもって取り組んでいました。大切に育ててきたからこそ，生まれる切実な課題だと思いました。「野菜作りは自然が相手。だからこそ自分たちにできることを毎日してあげることが大切。」という野菜先生（ゲストティーチャー）の言葉を胸に，毎朝，野菜の健康観察に向かう子どもたちの姿が見られた第２学年生活科での実践を紹介します。



＜水やりの量は？＞

１人１袋栽培で，自分で選んだ夏野菜を野菜先生と一緒に大切に世話して育て上げました。子どもたちが直面した問題は**「水やりの量」**。この問題を解決するために野菜の生まれた国を調べました。生まれた国について調べてみると，雨の量や気温について分かりました。調べたことを使って「雨が多い地域で生まれた野菜だから，きっと水が好きなはず。だから水を多めにあげる。」「乾燥した地域で育ったから，水は少なめにする。」と野菜に合った世話をしようと一生懸命になりました。

野菜名人ポイント
野菜の生まれた国について知ると，その野菜に合った世話の方法を考えることができる！

＜野菜の健康観察？＞

毎朝，栽培アイテムの「野菜電話」で野菜と話をし，健康状態を観察していました。



＜虫食い発見！どうしよう？＞

２学期には，大根作りに取り組みました。

９月まで順調に育っていたのですが，たくさんの大根が急に枯れてしまいました。子どもたちが直面した問題は**「大根の葉が虫に食われて枯れる」**。対策を考えるため，原因である虫について調査しました。その虫は，ヨトウムシ。生態を調べた子どもたちが考え出した対策は３つです。①虫よけネット作戦，②トラップ作戦，③におい・虫よけ作戦です。作戦を選んで活動開始です。

「作戦を試す→途中経過の観察をとおして交流する→改善してまた試す」を何度か繰り返すと，問題点が焦点化され，解決に近づくことができました。子どもたちが自分なりの解決策に取り組み，全員がＭｙ大根を収穫することができました。

活動例「①虫よけネット作戦」



第1弾
あっ，上が開いている！だからヨトウムシが入ってくるのか。



第2弾
ごみ袋で覆えばOK！でも，大根に元気がなく枯れそう…。太陽の光が当たらないし，袋の中が熱いなあ。



第3弾
スーパーに買い物に行ったとき，台所用水切りネットを見つけたよ。これなら太陽の光も当たるし，風も通るね。



野菜名人ポイント
原因（ヨトウムシ）について調べ，何度も作戦に取り組むことで問題を解決していくことができる！

＜自分たちで作れる肥料？＞

子どもたちが直面した問題は**「土も元気にする」**。野菜を元気に育てるため，自分たちで肥料を作りたいという思いをもち，落ち葉堆肥作りに挑戦しました。この堆肥を使って，次の野菜を栽培します。



夢中になれるものに出合い，真剣に考え，試し，取り組む姿をこれからも大切にしていきたいと思います。

附属人



#野菜作り　#土　#夢中

夢中になれるものに出合った時の，子どもたちの姿が好きです。毎日の生活に野菜の存在があります。愛情をもって毎日世話をすれば，野菜もたくさん話してくれます。子どもと一緒に土にまみれて野菜作りに夢中になってみましょう！

s1tanaka@wakayama-u.ac.jp

らいぶすくえあ＃3

体育科
２年Ｂ組担任
則藤　一起

力の限り　スロー×スロー
～強く！　速く！　狙う！～

●力の限り，投げてみよう！

新学習指導要領では，児童の投能力の低下傾向が引き続き深刻な状況にあることから，遠投能力の向上を意図し，陸上運動の中に児童の実態に応じて「投の運動」を加えて指導することが示されました。学習指導要領にも示されているように，遠くにカー杯投げるということに主眼を置いて単元を構成した５年生の実践を紹介します。

●いざ，スロー！

遠くにカー杯投げようとするとき，軸足と違う方の足が前に出され，身体はひねられ，腕は思い切りしなります。

しかし，子どもの様子を見ていると，足が揃ったまま，身体は前を向いたまま，ひじを前に出してボールを投げるなど，身体全体を使って投げられていないと感じました。本来，中学年までに身に付けておきたい投げ方ですが，できていない子どもが多かったのです。

単元の初めに投げ方をビデオで撮影してみると，自分の身体がどうなっているのかを知ることができました。そして，友だちの投げ方と比べさせながら“どんな風にすると，遠くまで投げられるの？”と問うことで，思考の深まりと技能の高まりをめざしました。

●スロー×スローの場！

①ノリックアウト（ストラックアウト）	的に向かって投げる【狙う】
②スピードマン（スピードガン）	ボールの速さを計る【カー杯】
③コーンバーン（コーン落とし）	コーンを狙って落とす【狙う】
④フライキャッチ（跳び箱キャッチ）	跳び箱に立てかけた踏み切り板に投げて，跳ね返ったボールをキャッチする【カー杯・捕球動作】
⑤ブルースロー（ブルーシート当て）	遠くの的に向かって投げる【カー杯】

※図１に体育館での配置を示しています。

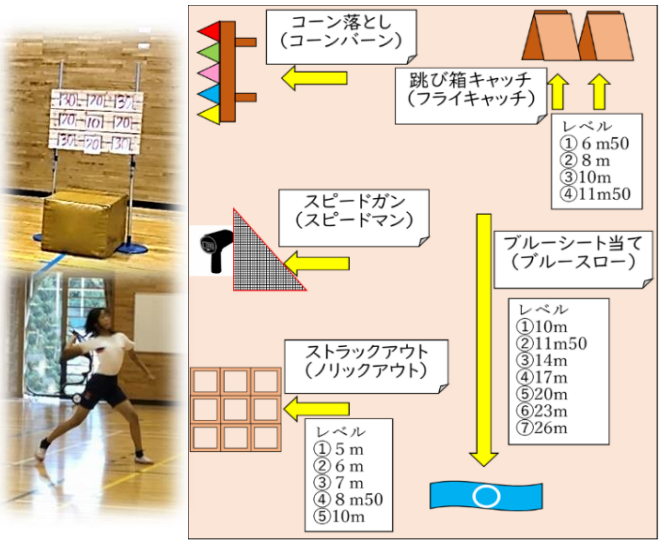
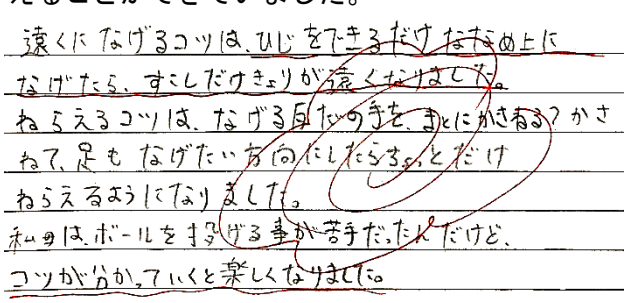


図１　スロー×スローの場

●単元を終えて！

全員が楽しみながら活動し，投げるコツについて考えることができました。もともと投げるのが上手だった子どもは，“より遠くへ”“より速く”と思いっきり投げていました。苦手だった子どもは，自分の目標レベルから投げることができており，レベルが上がったときは，とても嬉しそうでした。そして，「左足を前に出す」「ひじを上から出す」「左足のつま先を前に向かせる」「肩をすばやく回す」「にぎり方を強くする」など，友だちの発表をもとにし，自分なりに身体の動かし方を考えることができていました。


遠くになげるコツは、ひじをできるだけなるべく上になげたら、すこしだけきょりが遠くなりました。
ねらえるコツは、なげる目なのきを、まとにかさねる？かさねて、足もなげたい方向にしたらきょとだけねらえるようになりました。
私は、ボールを投げる事が苦手だったんだけど、コツが分かっていくと楽しくなりました。

また，単元後のソフトボール投げの映像より，踏み出し足をドンと力強く出そうと重心が下がっていたり，投げる手が思い切り振れていたり，ダイナミックな投げ方になりました。

附属人

＃忍Ｂ道場　＃FUZOKU 2020

「コオーディネーショントレーニング」に取り組み，身体の動かし方を考えています。

そして，今年は「忍Ｂ道場　FUZOKU 2020」も開催しています。ステッカー配布中！！

norifuji@wakayama-u.ac.jp



らいぶすくえあ#4

算数科
6年A組担任
松本　都望

おおいほう　すくないほう
～具体的なイメージで捉える活動～

第１学年の求大の学習では，安易に演算決定をしても正しい答えが導けます。一方でその式を図に表すと，式と図がつながらないことがあります。そこで，求大を具体的なイメージで捉え，図に表すことができる数学的表現力を育てたいと考えています。

子どもの日常と算数をつなぐため，「１Ａドッジボール大会」の結果を用いて，本時を行いました。

❒図に表してみると！？

求差と求大の問題場面を図に表し，その図を比較することで，求大の問題場面の理解が深まるのではないかと考え，本時では二つの問題場面を提示しました。

〈求差〉
ドッジボールをしました。Ａチームの内野は５人。Ｃチームの内野は８人でした。違いは何人ですか。

〈求大〉
ドッジボールをしました。Ａチームの内野は５人。Ｃチームの内野はＡチームの内野より３人多かったそうです。Ｃチームの内野は何人ですか。

多くの子どもは，求大の問題場面を図１のように表していました。

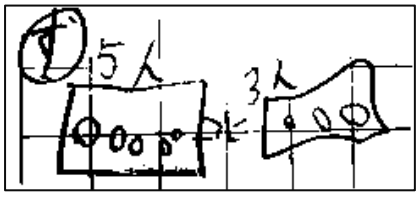


図１：求大の図

この図を描いた子どもは，式５＋３＝８，答え８人とノートに書きました。式と答えだけを見ると正答です。図１と同じような図を描いた別の子どもは，立式の根拠を以下のように話しました。

まつき：式は，５＋３＝８です。答えは，８人です。
ともみ：５は，Ａチームの内野の数です。３は，Ｃチームの内野の数です。合わせて８人です。

多くの子どもは，この説明に納得していました。しかし，図１とこの説明は，求大の問題場面を具体的にイメージして捉えておらず，安易に演算決定をしたと考えられます。５は，Ａチームの数ではなく，Ａチームの内野と同じ数いるＣチームの内野の数です。このＣチームの内野の数である５を，図に表したり，１年生なりの言葉で説明したりするところに至らない子が多くいました。

一方で，図２と図３のように，友達が描いた〈求差〉と〈求大〉の図を見て，「問題文は違うが場面は同じ」ということに気付きはじめている子どもがいました。二つの問題場面を比較して考えることは，求大の理解を深めるには有効であるといえます。

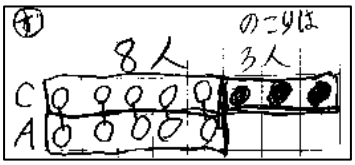


図２：求差を示す図

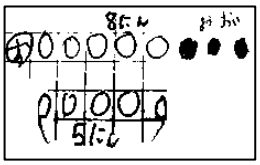


図３：求大を示す図

❒子どもの日常と算数をつなぐ

ドッジボール大会の結果を用いることで，子どもに具体的なイメージで捉えさせることができました。それは，図４のようなドッジボールのコートを描き，１対１対応の線を書き込んでいる子がいたからです。

この図を全体で共有して整理することで，求大の問題場面の深い理解につながるだろうと考えます。さらに，子どもをＡチームとＣチームの内野の人数分１列に並ばせ，手をつながせるなどしながら，１対１対応を再現するとよりわかりやすくなります。

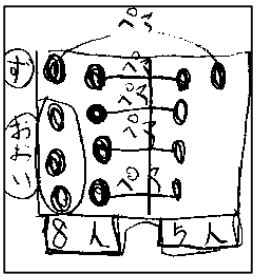


図４：コートをイメージした図

このような経験により，求大場面を具体的なイメージで捉え，図に描いて理解できるようになると考えています。ノートに描いた図を説明することに終始するのではなく，具体的にイメージしやすい場面（教材）設定の工夫により，子どもが実際に問題場面を捉える活動につながります。そうすることで，「たし算とひき算で違う問題だけど，同じ図になっているよ。」という驚きや，「Ａチームはチーム同士，ＣチームはＣチーム同士じゃないと足したり，引いたりできないよ。」などの，算数科の本質に迫る学習活動になると考えています。



附属人

＃日常と算数　＃イメージ　＃図

算数が大好きな子もそうでない子も「どうなるのかな？やってみよう！」と，もっと考えたくなる算数授業をめざします！子どもの日常と算数をつなぐ楽しい課題を一緒に考えてください！

tomomats@wakayama-u.ac.jp



らいぶすくえあ#5

プログラミング

３・４年Ｆ組担任
中西 大



低学年のプログラミング教育
～身近にある事象を可視化できるツール～

低学年でプログラミング的思考を養い，教科の目標を達成するためには，どのような教材を準備すればいいのでしょうか。今回は，フローチャートの活用を中心とした低学年・生活科における実践を紹介します。

●１年生「寒い冬をエコで暖かく過ごす」

機器を使わない「アンプラグド」と呼ばれるフローチャートを作成する方法があります。手順を一つずつ書き出して整理するため，どのような思考の流れになっているのか整理しやすくなります。

そこで，フローチャートを活用し，寒いときにどうすれば快適に過ごせるかを考えました。ここでは，思いついたままに暖をとればいいのではなく，エコについても意識しながら考えることにしました。フローチャートに書き出したもの（図１）を見せ合ったところ，上着を着たり，布団に入ったりすることだけではなく，「温かいお茶を飲む」なども出され，最初からこたつに入るよりいい（電気を使うため）という考えを確かめることができました。

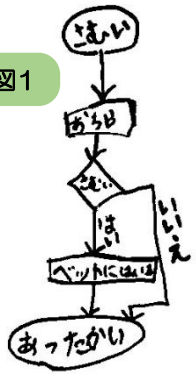


図１

フローチャートでは，考えだけではなく手順も同時に示せるため，簡単にできる上着を着るということが優先され，布団やこたつに入ることがその次に優先されることだと整理できました。中には，それでも寒ければ更に上着を着るなど，暖をとるための工夫をそれぞれ考えることができました。また，「条件」や「繰り返し」にあたる「暖かさを感じるまでランニングをする」なども考えていました。（図２）



図２

単語を四角に入れて順につなぐだけで，１年生にも簡単にできる作業でした。また，思考が可視化されているため，身を乗り出して友達の考えに触れようとする姿（図３）が見られました。


図３

●２年生「働く人の工夫や努力」

子どもたちは，街探検で病院とコンビニの自動ドアの動きの違いに気付いていました。そこで，どのように自動ドアが動いているのかをフローチャートに書き表しました。ドアの動きを確かめることで，自動ドアの製作や設置に携わる人の思いや工夫に迫ることができると考えたからです。

きのくにＩＣＴ教育（２次元コードより参照）にも示されている自動ドアの模型やプログラムを活用し，実演（図４）しながらプログラムの一部を紹介しました。動きを再現しながらプログラムを考えることで，より使う人の立場に立って考えるようになると予想したからです。


図４

授業では，開いてから何秒間止めておいたほうがいいのか，ドアが閉まるスピードはどれくらいがいいのかなど話し合っていました。「病院だとお年寄りや体調が悪い人が来るので，ゆっくり閉まるほうがいい」「コンビニは，食べ物もあるから早めに閉めないと…」など考えを出し合っていました。ドアが開いている時間や動くスピードの発言でしたが，子どもたちがそれらを決定する根拠に，利用者を意識したプログラマーの意図につながる思考があったと考えています。

また，授業の終盤には，「押しボタンがあって開く自動ドアもあったよね。」という発言がありました。その自動ドアを設置した人は，どんな意図をもっていたのか考えてみようという流れができ，製作者と利用者をつなぐプログラムを探る意識が，子どもたちの中で向上していることにも成果を感じました。

このように，プログラムを考えることでそのプログラムを考えた人の思いに迫ることができ，他教科等においても十分応用できる実践だと感じています。みなさんも，思考の表出やプログラムに隠された思いに迫らせる教材を考えてみてはいかがでしょうか。

附属人

＃プログラミング　＃可視化



今年は，中学年複式で理科を専門に研究を進めています。複式における学び方指導の充実により，子どもたちがより主体的に学べるようにしたいと考えています。

同時に，中学年におけるプログラミング教育を各教科等にどう取り入れるかについても研究を進めています。

dai0314@wakayama-u.ac.jp

らいぶすくえあ＃6

国語科
4年B組担任
宮脇　隼

観点を明確にした評価シート
～「読むこと」と「書くこと」の関連～

昨年度，６年生の国語専科として行った実践です。「読むこと」と「書くこと」を関連させた指導と，少し不透明になりがちな教師による「書くこと」の評価を可視化したものです。学級担任であれば，子どもたちの「書くこと」を評価し，それを子どもたちや保護者に伝えるには，個人懇談などをとおしてできます。

しかし，専科としてのかかわりだったため間接的に伝えることになりました。そこで，子どもたちにも保護者にも明確に伝えられるよう，以下のような方法をとりました。

１．読み取ったことを評価の観点に

「『鳥獣戯画』を読む」は，筆者にとって特別なものの素晴らしさを，それを知らない読者に伝える文章になっています。

子どもたちには，自分にとって特別なもの（好きなもの，大切なもの，宝物）についての熱い想いを大切にさせました。「これについてなら，自分は言いたいことがたくさんある！」「この面白さを友達に喋りたい！」そんな特別なものに焦点を当てるところからこの学習がスタートしました。カードゲーム，漫画，部屋に飾ってある置物，小さい頃の写真など，様々なものが出てきました。

次に，教科書教材の「『鳥獣戯画』を読む」を学習しました。この説明文を，自分たちの「特別なもの作文」に生かすために必要な見方・考え方は，「筆者は，どのような文章で自分の考えを読者に伝えようとしているのか。」でした。

【子どもたちと見つけた筆者の書き方の工夫と効果】
- １段落をいきなり説明から始めず，**物語のような始まり**の段落にする。［書き出し］
  →自分の伝えたいものに興味をもってもらえる。
- **物の見方**，豊かな想像力，細かな観察力。［見方］
  →ものへの想いが読者に伝わりやすい。
- 尾括型で書かれた説明文。［主張］
  →最後に**自分の主張**を読者に伝える事ができる。
- 自分の主張を納得してもらえるように**理由**を書く。
  →理由があると納得してもらいやすい。一つより二つある方がよりいい。［主張する理由］

※太字の内容が，［　］の評価シートの観点になります。

このような筆者の工夫を見つけ，その効果を考えました。そして，これらの工夫をどのように「特別なもの作文」に活用していくかを考えました。

これらの観点を読み取り，書くことの視点として示すことで，自分の作文にどれだけ活用できたのかが，本単元における書くことの評価になります。予め評価の観点を子どもたちに示しておくことで，自分の学習を評価できるルーブリックとなります。

また，子どもたちの表現力と成果物（作文）とのギャップを埋めるために，作文の最後には「後書き」を書かせました。「後書き」を書くことには，自分の作文を振り返り評価する「省察力」を高める効果もあったと考えています。そして，作文を書くにあたって考えていた想いを知ることも，一人一人の成果物を評価する上で重要なものになりました。子どもたちが意図的に考えて書いた文章でも，読者には伝わらないことがあるため，それを「後書き」として補うことができると考えています。

２．教師からの評価シート

子どもたちの書いた作文を評価する際には，評価シートを作りました。

2学期　国語（書く）　【1：　】

『鳥獣戯画』を読む　特別なもの作文

書き出し	見方	主張（尾括型）	主張する理由	細かい→大きい
○	○	○		○

カードゲームの中の１枚についてこれほど熱い想いをもって文章を書くことができるのはすごいなと感心します。　くんにとってそれほど思い入れのあるカードなんですね。しかも、その絵は浮世絵をモチーフにしていることを丁寧に説明しているので、カードを見たことがない先生にも想像しやすくなっています。扱い方が雑で傷んでしまったカードのようですが、これからは大切に保管し、長く付き合って欲しいと思います。そういうところも「鳥獣戯画」と似ているような気がします。最後に、文章的なことでアドバイスをします。絵の特徴である波の描き方について説明しているところが２カ所あります。これを１つの段落にまとめると、より読みやすくなるのではと感じました。（宮脇先生）

この評価シートを子どもたちに示すことで，この学習をとおして自分が学んだこと（筆者の物事への見方・考え方，表現力）を，どのように活用することができたのかが，わかりやすいものになったと思います。この授業展開を，３学期の随筆でも行いました。文章の内容は違いますが，子どもたちは読み取ったことを活用し，めあてを明確にして書く力を高めていました。

附属人

＃評価シート　＃書くこと　＃国語専科

子どもも教師も，「楽しくて力がつく」国語科教育をめざしています。テレワークでも，リアルワークでも構いません。一緒に学びたいです。

jun3804@wakayama-u.ac.jp



らいぶすくえあ#7



道徳科
3年B組担任
糸我 直人

命について考えよう
～道徳科でつなぐカリキュラム・デザイン～

「特別の教科　道徳（道徳科）」となり，自分の生き方について考えを深める道徳科の授業がより求められています。自分事として道徳的価値を深めることをめざして，３年生で『命について考えよう』をテーマに，道徳科と各教科等や日常生活を関連させて単元化しました。その中で，体験して学んだことが活用・発揮され，命についての学びがより深まるよう工夫しました。そのようなカリキュラム・デザインの一例を紹介します。

１．道徳的価値に関する体験

動物と触れ合い，命の大切さや他者との関わりを学ぶことで，子どもたちの豊かな心を育むことを目的に実施している和歌山市保健所主催の動物愛護啓発事業「わうくらす」（全４回）の体験を行いました。



どんな生き物にもかけがえのない命があるということを「わうくらす」の体験から学び，それを活用・発揮して，体験したことが体験だけで終わらないための学習活動や学習環境の工夫を行いました。

２．命や動物愛護に関する本の読み聞かせ

「わうくらす」における動物愛護の学習で学んだことを深めたり，命について様々な視点をもって考えたりするため，命や動物愛護に関する本の読み聞かせを行いました。「わうくらす」の体験をした後に読み聞かせをしたことで，子どもたちは，興味や実感をもって聞くことができました。

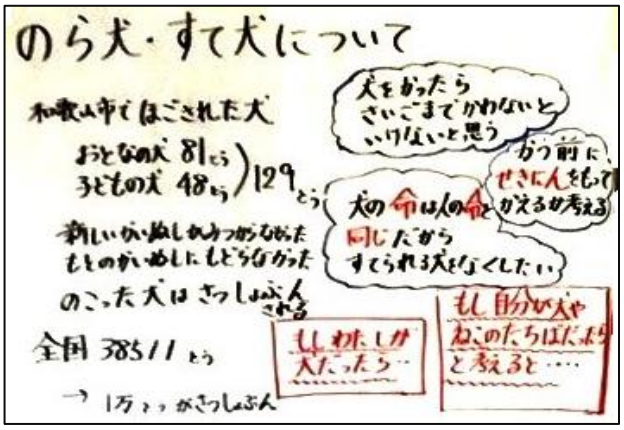
３．命や動物愛護に関する本のコーナー

学級に命や動物愛護に関する本のコーナーを設置すると，多くの子どもたちが，本を手に取り読んでいる姿が見られました。「わうくらす」での体験が子どもたちの関心につながっていました。



４．活用・発揮するための教室掲示

「わうくらす」での学びを教室に掲示すると，学んだことが，そのほかの場面で活用・発揮する姿が見られました。



５．道徳科「目の見えない犬」の授業より

他教科等で学んだことが，道徳科の授業で活用・発揮された場面を紹介します。

授業記録より抜粋

T：なぜ，きまりを変えてまで飼おうとしたのかな？
C：放っておいたら，愛護センターに引き取られて，運がよかったら新しい飼い主に引き取ってもらえるけど，目の見えない犬だから余計に引き取ってもらえず殺処分されるから。【自分の体験から学んだことと重ね合わせながら考えようとする姿】

T：自分の命はだれに支えられているのかな？
C：家族，ずっと「命のまつり」みたいにつながっている。（命に関する本のコーナーから本を取り出して紹介しながら説明した）【自分が本から得た情報と学びをつなげようとする姿】

本実践をとおして，道徳的価値に関する体験をすることだけでなく，その体験を深める学習活動を行ったり，学んだ知識の活用・発揮を促す学習環境を整えたりすることが，命についての学びがより深まる道徳となる手立てとして大切だと感じました。

附属人

＃道徳的価値　＃体験活動



「聴き合う・話し合う・高め合う」を大切にし，「自己のよりよい生き方」について考えを深める子どもたちの姿をめざしています。
道徳科での学びを日常生活とつなげる授業づくりを心がけています。

naohito7@wakayama-u.ac.jp

らいぶすくえあ＃8

図画工作科
5年C組担任
西原有香莉

生活の中の形や色とかかわる
～家庭学習に図工の時間を～

夕焼け空に目を向けると，濃い青から紫，そして赤へとグラデーションがかかり，とても綺麗な色を見ることができます。また，夕日の逆光で，遠くに立ち並ぶ家々がでこぼことした黒い形をふちどり，空の鮮やさとのコントラストを生み出すことで，とても美しい風景を見ることもできます。このように，世界は形と色などから成り立ち，私達は日常的に「造形的な見方・考え方」を働かせながら事象や事物とかかわっています。そのような見方・考え方を働かせることで，子どもたちの生活はより楽しく，そして豊かなものになることでしょう。

本稿は，臨時休校中に家庭学習で子どもたちが取り組んだ活動について紹介したいと思います。日常生活を営む家庭という環境だからこそできる学びがあるのではないかと模索しました。そして，図画工作科の授業で生まれる作品や芸術作品と呼ばれるものではなく，身の回りを取り巻く生活の造形のおもしろさに気付き，自分なりの意味や価値を見出すことをめざしました。

●身の回りの「“もよう”見つけ」

“もよう”と言われると，どこに描かれているもようを思いつくでしょうか。子どもたちの身近なものでいうと，カーテン，お茶碗，服，筆箱などでしょうか。子どもたちは，これらの模様（図１）をすぐに見付けます。

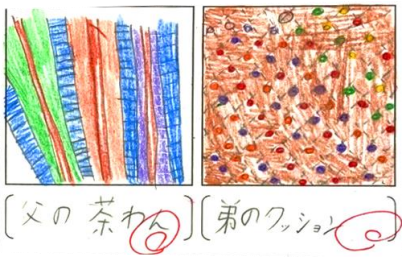


図１：デザインされたもよう

しかし，今回見付けるのは，そのような模様だけではありません。例えば木製の机にも模様があります。表面をよく見てみると，木目があります。金魚の体をよく見てみると，表面にはうろこがあり，その形のアウトラインをなぞっていくと，“もよう”になります。

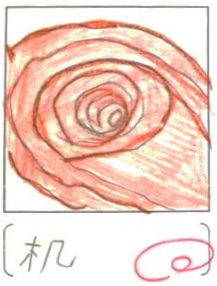


図２：自然に生み出されたもよう

このように，人によってデザインされて創り出された模様のみに留まらず，自然に生み出されたもの（図２）も模様としました。そして，“もよう”見つけの活動を設定して「模様コレクション」をつくりました。

●見つけた“もよう”にオリジナルの色つけ

これまで紹介しているもようには，すでに色が塗られています。しかし，実際の活動は二段階に設定しており，はじめは見つけた模様のアウトラインだけを捉え，黒の線で描き出します。次に，描き写した模様に，元の色と違った色を塗ります。二段階の活動によって，図３のような作品や図４のような振り返りがありました。


図３：色を変えたもよう

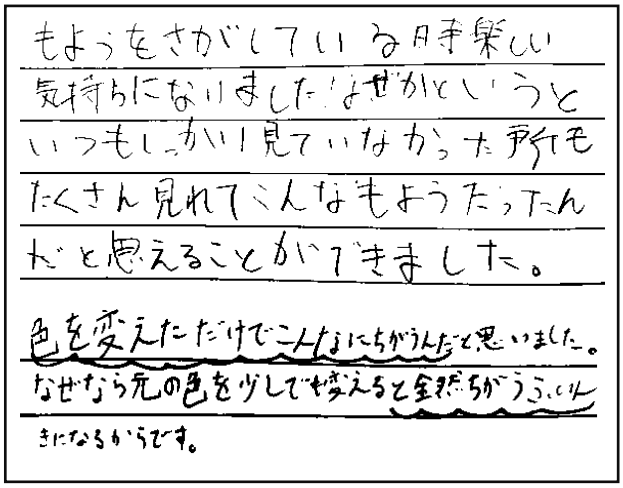


図４：振り返り

図４の振り返りから，「造形的な見方・考え方」を働かせることで，身の回りの事物とのかかわりに深まりがあったことや，色が生み出す効果を感じ取ったことから自身のイメージに変化があったことを実感していることがわかります。

今後も子どもたちそれぞれがもつ感性を生かした造形的な見方・考え方を働かせると共に，育むことができる活動を考えていきたいです。

附属人

＃造形的な見方・考え方



子どもたちの豊かな発想から生み出される活動や作品を見るのが大好きです！
子どもたちが思いをもって，豊かに発想を広げながら活動できるような題材を考えています。

y2486@wakayama-u.ac.jp

2020 教育研究発表会

2020年10月31日(土) 予定

未来に生きて働く資質・能力の育成（３年次）

～探究の質を高める授業づくりの「しかけ」と評価の在り方～



◇21本の授業を公開！

◇子どもの探究の質を高める授業づくりの「しかけ」

◇探究の質の高まりを見とる指標を活用した評価

全体講師　國學院大學教授　**田村　学**　先生

第13回 ICT活用授業研究会(仮)

2021年1月23日(土) 予定

プログラミング的思考・情報活用能力の育成・教科等におけるICT活用

校務の情報化・遠隔授業の可能性



全体講師　和歌山大学教職大学院教授　**豊田　充崇**　先生

公開授業
豊田先生による講評

新型コロナウイルス感染症の影響により，変更することがあります。

FROM EDITORS

『LIVE 創 REATOR』には，「生き生きと本物を創り出すひと」という意味が込められています。私たちが創り出す本校の取り組みをご紹介していきます。

本校の行事・授業・提案・取り組みにつきましては，ホームページでの発信も充実しております。日々の実践を考える情報源としていただければ幸いです。ぜひ，ホームページも合わせてご覧ください。

和歌山大学教育学部附属小学校
〒640-8137 和歌山市吹上 1-4-1
TEL　073-422-6105
FAX　073-436-6470
E-mail　fuzoku@ml.wakayama-u.ac.jp
URL　http://www.aes.wakayama-u.ac.jp

Mail

HP



研究広報部員：糸我　中西　静川　中岡　川端　西川
デザイン&編集：D@i'z Art Image

研究広報部